

市政トピックス

仙台文学館新館長に佐伯一麦氏 就任

4月1日付で、仙台文学館の新館長に、仙台市在住の作家・佐伯一麦氏が就任しました。佐伯氏は、初代館長の作家・井上ひさし氏、2代目の歌人・小池光氏に引き継ぎ、3代目となります。

佐伯氏は仙台市出身で、昭和59年に「木を接ぐ」で小説家としてデビュー。三島由紀夫賞を受賞した「ア・ルース・ボーイ」や、東日本大震災後、全国各地の水辺の災害の痕跡をたどる旅の中で書いた「山海記」など、多数の著書を発表しています。また、「仙台文学館ゼミナール」の講師を長く務め、広く市民に文学を読むこと、書くことの楽しさを伝えてきました。



▲仙台文学館新館長・佐伯一麦氏

就任に先立ち、2月5日に郡市長を訪問。「仙台には小・中学生の詩の作品を対象とした『晩翠わかば賞・晩翠あおば賞』のように、若い人たちが言葉を自由に使い、表現を生み出す機会があります。その若い才能の芽を見守っていくのも文学館の役割。文学ひいては仙台の活性化につながるよう、幅広い世代に利用され、愛される施設にしたい」と抱負を語りました。

市政トピックス

東日本大震災仙台市追悼式を開催

東日本大震災の発生から9年となる3月11日に、東日本大震災仙台市追悼式を、宮城野体育館で行いました。

今年も例年どおりの開催に向けて準備を進めてきましたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止のための重要な時期であることを踏まえ、今年は、献花のみを行う方式で実施しました。

ご遺族と招待者の方々が、会場の祭壇への献花を行い、地震発生時刻に黙とうを捧げました。また、勾当台公園市民広場や区役所にも献花場を設置。合わせて約5700人の方が追悼に訪れ、犠牲となられた方々のご冥福を祈りました。

市政トピックス

スマトラトラとグラントシマウマの愛称が決定しました

2月23日、八木山動物公園で、スマトラトラとグラントシマウマの子どもの愛称が決定し、命名式が行われました。

八木山動物公園では、昨年10月8日に誕生したオスのスマトラトラと、12月11日に誕生したメスのグラントシマウマの子どもの愛称を、園内に設置した応募箱で募集。合わせて1000通を超える応募の中から、スマトラトラを「アオ」と、グラントシマウマを「モモ」と命名しました。「アオ」は、ハワイ語で日光や夜明けという意味があり、健やかな成長を願う気持ちから、「モモ」は桃の花言葉



▲スマトラトラ「アオ」



▲グラントシマウマ「モモ」(左)・母の「アンス」(右)

市政トピックス

市政トピックス

令和2年度の主な組織改正(4月1日付)

市では、4月1日付で組織改正を行いました。主な組織改正は次のとおりです。

●子ども・子育て家庭や高齢者・障害者への支援体制の充実のために

●家庭健康課の分割および保育給付課の新設(区役所)

児童虐待等への迅速な対応、高まる保育需要や多岐にわたる給付制度へのよりきめ細かな対応など、複雑化・多様化する子ども・子育て家庭の支援ニーズに対応するため、区役所家庭健康課を分割し、「家庭健康課」および「保育給付課」としました。

●宮城総合支所保健福祉課の分割および障害高齢課の新設(青葉区)

高齢者や障害者への支援施策をよりの確に展開するとともに、複雑化・多様化する子ども・子育て家庭の支援ニーズに対応するため、宮城総合支所保健福祉課を分割し、「保健福祉課」および「障害高齢課」としました。

※区役所家庭健康課・保育給付課、宮城総合支所保健福祉課は、「子ども家庭応援センター」として、妊娠から出産・子育て期にわたり、子どもや子育て家庭全般に関

する切れ目のない支援を行います。市中心部の救急需要への対応のために(消防局)

●救急対策係の新設

高齢化の進展により救急出場件数が増加する中、特に需要が高い市中心部に救急隊を配置するとともに、多数の傷病者が発生した場合等の救急対応を強化するため、救急課に「救急対策係」を新設しました。

●水道事業の危機管理体制強化のために(水道局)

水道危機管理室の新設
水道事業における危機事象発生時の機動的かつ組織横断的な対応等をこれまで以上に確実かつ迅速に行うため、局直轄の「水道危機管理室」(課相当)を新設しました。

●ガス事業の民営化に向けた取り組みの推進のために(ガス局)

事業改革調整室を「民営化推進室」に名称変更
事業継承者の公募、選定を行うなど、ガス事業の民営化に向けた具体的な取り組みを進めるため、事業改革調整室(課相当)の名称を変更し、「民営化推進室」(課相当)としました。

●各組織の業務内容は4月1日からホームページでもご覧いただけます

市政トピックス

「雪菜レシピ」を大学生が考案

であるチャージングにちなみ、みんなに愛されてほしいとの思いから選ばれました。

命名式では、命名者の方々へ認定証などの贈呈が行われました。

市では、宮城大学と連携し、仙台の特産である雪菜の消費拡大を目的に加工品レシピを開発する「仙台市特産品プロジェクト」に取り組んでいます。昨年6月から

学生が雪菜の生産者や野菜ソムリエなどのアドバイスを受け、試作を重ねてきました。2月17日、飲食店や食品加工業者の方々が対象に「雪菜調理アイデア提案会」が開催され、食パン、がんもどき、スムージーなど、雪菜を使用した7品目のレシピの紹介と試食会を実施。参加した方々からは



▲学生のアイデアが光る試作品

「仙台の特産物をいろいろなアレンジで広めていく事は大切」などの感想が聞かれました。市では今後、このレシピの中から2品程度を選定し、商品開発を行う企業を募集して仙台の新たな特産品の商品化を目指します。

3.11震災文庫を 読む

東日本大震災を語り継ぐための市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊からよりすぐりの本を、紹介します。

「いちばん長い夜に」



乃南アサ／著 新潮社 刊

前科者である女2人組(芭子と綾香)が主役の連作短編集。後半の4編は、地震の時刻に泉区役所近辺でたまたま取材中だった著者の体験が芭子の目を借りて直接描かれています。芭子は、殺人を犯したため地元仙台に帰ることができないでいる綾香の家族の消息を調べにこっそり仙台に行き、地震に遭いました。ようやく市バスで青葉区役所付近までたどり着くまでの乗客の様子、暗闇のホテルで夜を迎える避難者の様子はまるで実録小説のようです。綾香は、東京に戻った芭子の思いを聞いて、ついに被災地支援に向かいます。犯罪者の再生を震災支援に絡めて描く、その時でしか書けなかった感動作。

「死者のざわめき―被災地信仰論」



磯前順一／著 河出書房新社 刊

東北地方の被災地をめぐる、慰霊塔や各地の傷ついた地蔵、さらには「冥婚」と呼ばれる死者の結婚儀式に至るまで、生活に根付く信仰を考察した鎮魂の書。「かわいそうな被災者」や「明るくたくましい人間像」などの二極化した被災者イメージを覆すのは、死者の声を感ずる皮膚感覚であり、それが「死者のざわめき」であると語ります。被災地の実情を、沖繩や原発地域、部落差別地とも合わせて深く考察していることや、「わたしたち」という言葉に潜む排除性の指摘、震災や原発を歌い続ける沢田研二の2014年南相馬ライブも取り上げている点で、類書とは違う目の配り方の違いが際立っています。

●紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます 問市民図書館 ☎261・1585